69-1　河川争奪の等々力渓谷と九品寺（距離約 4.5km）

【街歩き概要】

等々力駅から轟の聞こえそうな 23 区内唯一の自然渓谷へと足を運ぶ。

渓谷へ足を入れる前に河川争奪のことを学び、そして等々力渓谷から出てきた谷沢川と丸子川が交差するちょっと不思議な地点を経て、九品仏浄真寺へと向かう。

等々力渓谷

【道順】

東急等々力駅→等々力渓谷（等々力渓谷書院庭、等々力不動尊、横穴古墳、不動の滝など）→丸子川サイフォン→御嶽古墳→西岡 13 号古墳→宇佐神社→尾山台駅（→九品仏浄真寺→九品仏駅）→等々力駅

【街歩き解説】

①等々力渓谷

静かさと緑にあふれる等々力渓谷で、横穴古墳、不動の滝、等々力不動尊、等々力渓谷書院庭などを訪ねる。等々力渓谷は、（国分寺）お鷹の道に連なる国分寺崖線の最南端部に近い場所に位置する。

その等々力渓谷を流下する谷沢川は、かつて等々力駅の北から東へと流れて九品仏川へと注いでいたが、河川争奪によって南へと流れを変えたものである。

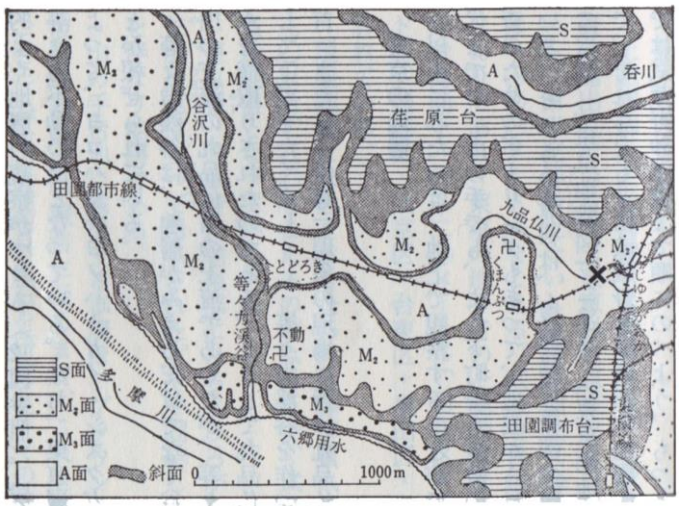
等々力駅の少し西へ進んでみると住宅街の隅に水車跡碑が残る。まずはここを訪ねて、辺りで現矢沢川が掘り下げている崖の深さを記憶しておく。次に表通りへ出て、渓谷入口へ向かう目黒通りの、最低部も確認する。ここから等々力駅ホーム方向へと結ぶ辺りに旧谷沢川（現九品仏川）が東西に流れていたのだ。そのことは、下の地形分類図やデジタル標高地形図その他が示す谷の拡がりで、容易に読み取ることができるだろう。

そして渓谷入り口の看板のある階段を下り、渓谷の下から目にした崖の高さと、先の水車跡碑のところで見た谷の深さとを比較してみるといい。前者の方が格段に深い谷になっていることがわかる。

等々力渓谷を南下していた小さな流れが、渓谷段丘崖からの湧水などによって、これだけ勢いのある、そして大きな谷頭侵食を続けて、それまで東流していた旧矢沢川を（河川）争奪したのだ。

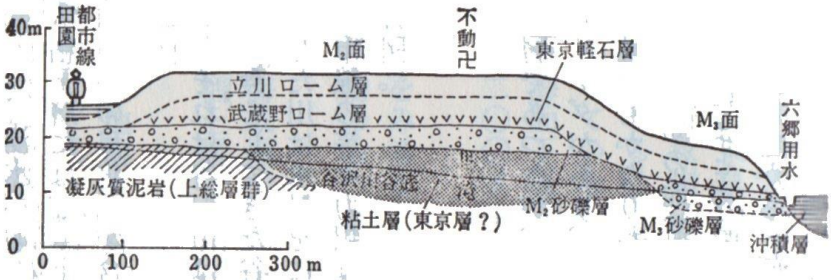
段丘崖の凝灰質泥岩を不透層として、その上に積み重なる軽石層、そして関東ローム層などからの浸みだし湧水のようすは、不動滝付近だけでなく渓谷の随所で層をなす露頭とともに確かめられるだろう。

水車跡碑



11図　等々力付近の地形分類図
谷沢川の沖積面（A）と九品仏川の沖積面が一連の谷底であること、谷沢川が九品仏川上流を争奪したことがよくわかる。自由が丘駅のすぐ西の九品仏川北岸の×印は昭和35年に地盤沈下をおこしたところ（96ページ参照）。

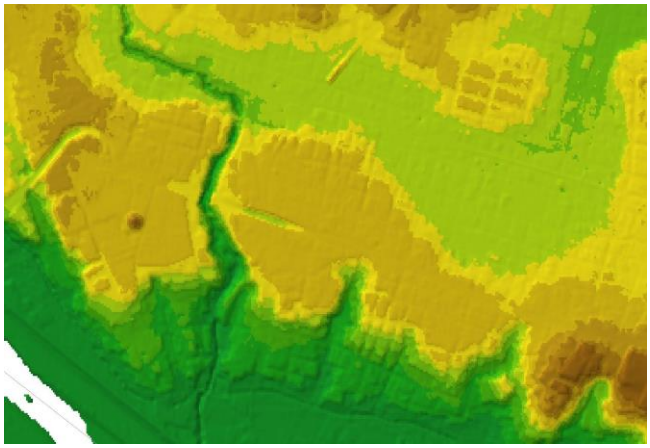
等々力付近の地形分類図（「東京の自然史」貝塚爽平）



12図　等々力渓谷付近の南北断面図

等々力渓谷の谷壁にみられる地層をもとに模式的に描いたもの。木下邦太朗などの資料による。

等々力渓谷付近の南北断面図（「東京の自然史」貝塚爽平）



デジタル標高地形図

1/10,000 地形図「自由が丘」（H11 修正）

1/25,000 地形図「東京西南部」（S4 修正）「今昔地図」

不動の滝と等々力不動尊

等々力渓谷書院庭

②丸子川サイフォン

等々力渓谷がその両岸の崖の高さをしだいに低くして南下した谷沢川が、多摩川との合流地点近くで丸子川とサイフォンによって交差した形に（地図では）なっている。

しかし、現在はサイフォンではなく、丸子川が谷沢川の上流側と下流側に分割されていて、上流側の水は谷沢川と合流して南下し、下流側については改めて谷沢川から揚水して流しているように見える。少なくても、かつてはサイフォンになっていたことが旧版地形図からも確認できる。

今回の歩きで、地形的なみどころは、残念ながらここまでである。あとは、一般的な寺社巡り、観光地巡りをするのだが、

辺りには、世田谷大場代官屋敷、芦花公園の徳富蘆花屋敷、世田谷で農家をする下山家などの古い民家などの木造建築が残る、等々力駅近くにも、「ざいもく屋」という名のレストランがあって、同建物は、築 120 年以上の日本家屋である。そこはなぜか、本格的な中国料理の店である。

丸子川が矢沢川をサイフォンで跨ぐ地点

③御嶽古墳ほか

等々力不動尊の道路を隔てた東側には、5 世紀中ごろのものだという御嶽古墳があって、頂上までの道には小さな石仏が、てっぺんには蔵王権現が奉られている。

御嶽古墳の東、尾山台派出所の裏手には西岡 13 号古墳があり、これは狐塚古墳ともいうらしい？　その眺望の良いてっぺんにも祠跡が残る。さらに東、庚申塔も残る宇佐神社の裏手には「八幡塚古墳」があって、頂上には祠が残る。その向かい側は、新しい五重塔のある伝乗寺。

さらに、等々力渓谷には横穴墓、さらに西には高さ 11 メートルほどの（ホタテ貝型）前方後円墳、野毛大塚古墳もある。それらは皆、野川北の国分寺崖線や石神井川など開析谷をのぞむ台地上に多く分布している。ひとえに人と動物の飲み水が身近だったからではないだろうか。この辺りにはたくさんの古墳が残っているから、これらをつなぐように進む。

御嶽古墳と丸子川

西岡 13 号古墳の上下

伝乗寺と八幡塚古墳

④九品仏川

昭和 35 年、九品仏川の流れに近い自由が丘駅付近で地盤沈下が起きた。それは、段丘に位置する銀行支店のビル建設に伴う地下水のくみ上げによるものであった。地盤沈下したのは、40 メートルほど西へ離れた九品仏川の谷底低地に位置する狭い範囲の住宅であった。なぜ、段丘でくみ上げた水による水位低下で地盤沈下を起こしたのか。段丘での地下水位低下が、これに連なる低地の泥炭地にまで及んで土地を収縮させ、しかも泥炭地の縁で不等地盤沈下して被害を大きくしたのだ。（「東京の自然史」貝塚爽平より）

今は、地下暗渠化緑道になることの多い都市河川だが、基本的な地盤に変化はないから、いい土地利用をするには、過去の地性を知ることは大切である。

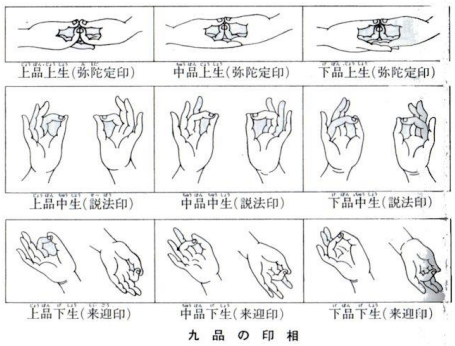
⑤九品仏浄真寺（くほんぶつじょうしんじ）

浄真寺の地は、もともとは世田谷吉良氏系の奥沢城であった。

小田原の役後同城は廃城となったが、当地の名主七左衛門が同地に浄真寺を開山した。広い境内の本堂の対面に 3 つの阿弥陀堂があり、それぞれに 3 体合計 9 体の阿弥陀如来像が安置されている。 この 9 体はそれぞれ、上品上生（じょうぼんじょうしょう）、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生を表し、これ

をあわせて九品（あるいは九品往生）というのだとか。 この九品の仏のことから、浄真寺は通称「九品仏」と呼ばれているという。

九品仏本堂と参道で



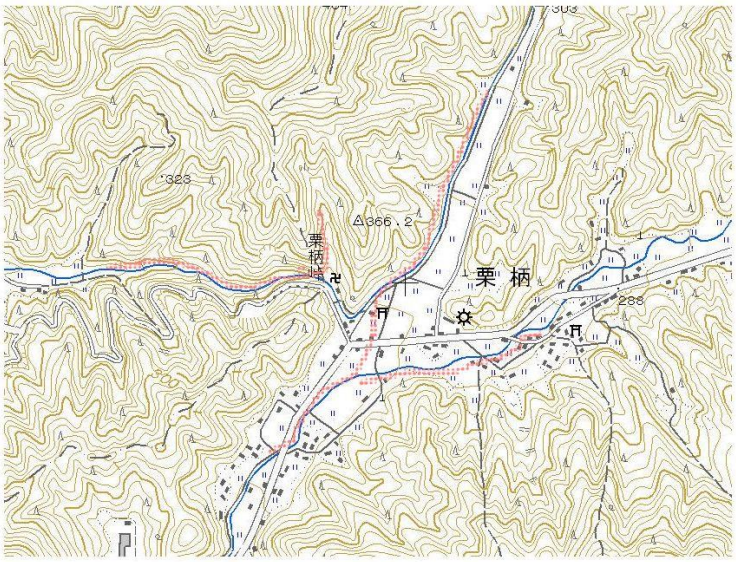
九品仏とその上品さ？

地図豆知識：河川争奪と谷中分水界　（再掲）

河川は、分水界と海岸線などで閉じる領域、河川流域を集水域としている。

言い換えるなら、隣接する河川は、分水界を境にして領地争いをしているに等しい。ときに、河川浸食などによって分水界を取り崩すことがあれば、隣り合う水流の領地である河川流域を奪い取るだろう。

例えば、二つの河川に高度差があって、一方の河川の侵食が激しい場合、分水界が次第に浸食の少ない他の一方の河川の側に移動し、水流を奪う現象を河川争奪といい。これによって生じた地形を河川争奪地形という。



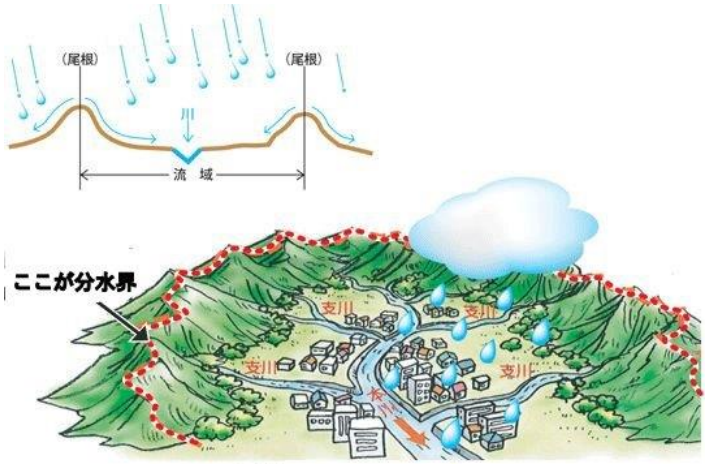
兵庫県篠山市栗柄・丹波市

岐阜県本巣市
根尾奥谷

河川争奪と谷中分水界（旧流路と現在の分水界を挿入）

地図豆知識：分水界　　（再掲）

分水界とは、流域（水系）の境界線のことで、分水嶺とも呼ばれる。すなわち、雨水が異なる河川に流れ込む境目のことだから、一般的には稜線と分水界は一致する。だだし、等々力渓谷（谷沢川）で身近に見られるように、河川侵食の激しい河川が、隣接する他の河川の分水界を奪う形で流路変更する河川争奪地形などでは、谷中に分水界が存在する（谷中分水界：こくちゅうぶんすいかい）から、顕著な尾根とはならない。



分水界・流域というもの（鶴見川流域ネットワーキング HP から）

ルートマップ

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　yamaoka　mitsuharu　+＊＊＊+